

中高生のボランティア動機，ボランティア活動の 援助成果の探索的検討¹⁾

—感想文の内容分析を通して—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 山本 陽一

筑波大学人間系 松井 豊

Exploratory investigation of support outcomes from volunteer work by junior and senior high-school students

Youichi Yamamoto (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Otsuka, Bunkyo 112-0012, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The motives for undertaking volunteer activities and their effects are examined for junior and senior high-school students (N = 363), who were required to write down their impressions after undertaking volunteer activities. Analysis of these descriptions revealed four types of motives—interests, other-oriented, self-oriented, and extrinsic motives—and eight kinds of effects—understanding and interest in the activities, understanding and concern for recipients, good relationship with recipients, good relationship with people apart from recipients, positive evaluations of the activities, negative evaluations of the activities, understanding of work, and sympathy and joy from being appreciated. Comparisons were also made between junior and senior high-school students, which indicate that more junior high-school students had an other-oriented motive and obtained an understanding and interest from the activities, whereas more senior high-school students had a self-oriented motive and obtained an understanding of work. Furthermore, a correspondence was observed between the motives and the effects. The study suggests that junior and senior high-school students acquire knowledge from undertaking volunteer activities.

Key words: helping behavior, volunteer work, volunteer motives, effects for helper

問題と目的

本研究は、ボランティア活動に参加した中高生の

1) 本研究は、平成22年度筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻修士論文の一部を修正したものである。

本研究の分析に当たり、感想文集をご提供いただいた、川口市青少年ボランティア育成委員会の皆様に感謝申し上げます。

同活動に対する感想文の内容分析を通して、中高生のボランティア動機およびボランティア活動の援助成果を探索的に検討することを目的とする。

ボランティア活動は、「報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体の福祉増進のために行う活動」と定義される(総務省統計局, 2001)。日本におけるボランティア活動への関心は、1995年に発生した阪神・淡路大震災での活躍を契機として高まり、現在では災害支援

に限らず、さまざまな領域で活動が行われている。

また1990年代以降、青少年が行うボランティア活動に対する関心が高まっている。中央教育審議会(1996, 2002)は、青少年の人間性や社会性を育む活動として、学校教育や社会教育においてボランティア活動の機会を増やすことを提言している。中学校や高等学校では、社会体験活動として、ボランティア活動や奉仕活動が授業に導入されている(例えば、東京都立高校における教科「奉仕」の導入など)。しかし、本来は自発的な取り組みであるボランティア活動を義務的に行うことに対する疑問の声が挙がっている。

総務省青少年対策本部(1994)は、全国の青少年2052名を対象としたボランティア活動の実態調査を行った。同調査によると、中高生のボランティア動機(複数回答)は、「困っている人の手助けをしたい」、「地域や社会をよりよくしたい」、「何か新しく感動できる体験をしたい」などであった。また、ボランティア活動経験者の66.2%が、自らの活動に満足しており、活動に満足している理由(複数回答)は、「地域のために役に立った」、「困っている人のために役に立った」、「思いやりの心が深まった」などであった。

青少年のボランティア活動に関する研究

援助行動は援助が行われる状況から、日常的援助、募金的援助、自発的援助に分類されており(松井, 1981)、ボランティア活動は自発的援助の一種と捉えられる。青少年の援助行動研究は、青年心理学領域を含めた発達心理学領域と社会心理学領域において行われている。

発達心理学領域では、向社会的行動や愛他的行動の動機について Eisenberg-Berg (1979)、松井(1991)、中里・加藤・杉山・松井・瀬尾(1992)、松井・中里・石井(1998)などによって検討されている。

Eisenberg-Berg (1979)は、小学生から高校生までの125名に対する質問紙調査から、中学生の向社会的行動の動機は共感的な動機が多いが、高校生の向社会的行動の動機は、内在化された価値に基づく動機が増えることを明らかにした。

松井(1991)は、高校生と大学生876名に対する質問紙調査から、愛他的行動の動機は情緒的な動機が多く、情緒的な動機の割合は高校生よりも大学生が多いことを明らかにした。

中里他(1992)は、日本・米国・韓国・中国の高校生の愛他性に関する調査を行い、日本の高校生は愛他性が4か国で最も低く、情緒的な動機から愛他

的行動を行う割合が他国よりも高いことを明らかにした。

松井他(1998)は、中高生の愛他性について米国など5か国の国際比較を行い、日本の高校生は、情動的な動機から愛他的行動を行う割合が他国よりも高いことを明らかにした。

このように発達心理学領域では、発達段階による向社会的行動や愛他的行動の動機の違いが検討されていたが、対象をボランティア活動に限定した研究は行われていなかった。青年心理学領域では、ボランティア活動への参加が高校生の社会的関心を高めることや (Johnson, Beebe, Mortimer, & Snyder, 1998)、福祉ボランティア活動経験が青少年の要援護者に対する態度を肯定的に変化させる(川元・佐藤・菊田・松尾・諏訪・土井・中島・高野・柴田, 1999)ことが明らかにされていたが、ボランティア動機や援助成果に着目した検討は行われていなかった。

一方社会心理学領域では、大学生や成人を対象にボランティア動機に関する研究と、ボランティア活動の援助成果に関する研究が行われている。

ボランティア動機研究

第1の研究領域であるボランティア動機研究は Oda (1991)、山口・高木(1993)、Clary, Snyder, Ridge, Copeland, Stukas, Haugen, & Miene (1998)、青山・西川・秋山・中迫(2000)によって行われている。

Oda (1991)は、仙台市内でボランティア活動を行う成人男女51名に対する面接調査から、ボランティア動機を“他者志向動機”、“自己志向動機”、“互恵的動機”の3つに分類した。

山口・高木(1993)は、大学生213名を対象とした質問紙調査から、ボランティア動機を“他者共感的動機”、“自己啓発的動機”、“規範的動機”、“功利的動機”の4因子に分類した。

Clary, et al (1998)は、アメリカのボランティア活動を継続する成人男女465名を対象とした質問紙調査から、ボランティア動機が“価値”、“知識”、“社会的”、“経歴”、“自我防衛”、“強化”の6つに分類した。さらに、ボランティア動機が活動によって充足されると、活動継続意欲が高まっていた。

青山他(2000)は、老人福祉施設で活動する成人男女150名に対する質問紙調査から、介護ボランティアへの参加動機を“自発的動機”、“共感的動機”、“報酬期待動機”、“社会的規範動機”、“技術・知識の活用動機”の5因子に分類した。

このように、成人のボランティア動機に関する研

究では、複数の動機の存在が明らかにされていた。Batson & Oleson (1991) は、援助可能者が援助を行う動機について、他者の利益を増すことを目的とした“愛他的動機”と、援助を必要とする相手に直面することにより生じた苦痛を低減することを目的とした“利己的動機”に区別している。この分類に従うと成人のボランティア動機は、困っている人を助けたいといった“他者志向の動機（他者志向動機、互惠的動機 (Oda, 1991)、他者共感的動機、規範的動機 (山口・高木, 1993)、価値、強化 (Clary et al., 1998)、自発的動機、共感的動機、社会的規範動機 (青山他, 2000))”と、活動を行うことが活動者自身に利益をもたらす“自己志向の動機（自己志向動機 (Oda, 1991)、自己啓発的動機、功利的動機 (山口・高木, 1993)、知識、社会的、経歴、自我防衛 (Clary et al., 1998)、報酬期待動機、技術・知識の活用動機 (青山他, 2000))”に分類できると考えられる。

ボランティア活動の援助成果研究

第2の研究領域であるボランティア活動の援助成果研究は、妹尾・高木 (2003)、妹尾 (2008) によって行われている。

援助成果は「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」と定義される (妹尾, 2001)。

妹尾・高木 (2003) は、ボランティア活動を行う中高年の男女261名に対する質問紙調査を実施した。調査の結果、中高年のボランティア活動の援助成果が“愛他的精神の高揚”、“人間関係の広がり”、“人生への意欲喚起”に分類され、援助成果が活動継続意欲を高めていた。

妹尾 (2008) は、専門学校生157名に対する質問紙調査を実施した。調査の結果、若者のボランティア活動の援助成果が“自己報酬感”、“愛他的精神の高揚”、“人間関係の広がり”に分類され、援助成果が活動継続意欲を高めていた。

このように、ボランティア活動の援助成果研究では、援助成果は主に活動の対象となる被援助者との対人的な関わりから得られ、援助成果の内容は、活動内容や活動者の年齢により異なると考えられる。また活動経験を通じて得られた心理的報酬が、活動者の活動意欲を高めると考えられる。

本研究の目的

中高生はボランティア活動経験を通じて、社会に対する関心を高めていると考えられるが (Johnson, et al., 1998 など)、中高生のボランティア動機や活

動から得られる心理的報酬の内容に着目した研究は行われていなかった。しかし総務省青少年対策本部 (1994) の結果から、成人と同様に中高生においても、ボランティア動機や活動から得られる心理的報酬が複数存在する可能性が考えられる。さらに、中高生が学校の授業や課題としてボランティア活動を行う機会が増えており、他者志向の動機や自己志向の動機といった内発的な動機だけではなく、義務的に活動に参加するといった外発的な動機が存在する可能性が考えられる。

そこで本研究では、ボランティア活動を行う中高生のボランティア動機と援助成果を探索的に検討することを第一の目的とする。

また発達心理学領域では、向社会的行動の動機は道徳的推論などの認知能力の発達に伴い、共感的な動機から内在化された価値に基づく動機へと発達的に変化することが明らかにされていたが (Eisenberg-Berg, 1979, など)、日本の青少年の愛他的行動の動機は、発達段階に関わらず共感的な動機が高いとの報告もあり (中里他, 1990など)、知見は一貫していない。発達段階の違いによりボランティア動機やボランティア活動から得られる心理的報酬が異なる可能性が考えられるが、発達段階による違いについては検討されていなかった。

そこで本研究では、ボランティア動機とボランティア活動の援助成果の中高生間の違いについて検討することを第二の目的とする。

また Clary et al. (1998) によれば、ボランティア動機が活動経験により充足された場合に、活動継続意欲が高まっていた。この結果から、ボランティア動機と活動の心理的報酬である援助成果との間には対応関係が存在する可能性が考えられる。しかし、ボランティア動機と援助成果との関連についてはこれまで検討されていなかった。

そこで本研究では、ボランティア活動を行う中高生のボランティア動機と、ボランティア活動の援助成果との関連について検討することを第三の目的とする。

なお本研究では、中高生のボランティア動機とボランティア活動の援助成果を把握するために、ボランティア活動に参加した中高生の同活動に対する感想文を分析資料として用いる。感想文は記入者の主観に基づいたものであり、一定のバイアスが生じていると考えられるが、感想文には中高生がボランティア活動に参加した動機や、活動から得た気づきや学びが記述されている。そのため、ボランティア動機やボランティア活動の援助成果を探索的に把握するうえで有用な資料であると考えられる。

方 法

資料の収集法

2005年度に埼玉県川口市で実施された、ボランティア体験事業に参加した中高生の感想文集を、分析に用いた。

感想文集に収録された感想文は、活動に参加した中高生が活動終了後に活動の感想について記述したものであり、中高生がボランティア体験を行った施設や団体の担当者などに配布することを前提に作成されたものである。中学生の感想文集を集めた感想文集と、高校生以上の感想文集の2種があった。高校生以上の感想文集は、中学生の感想文集に比べて掲載数が少なかったため、2004年度の高校生の感想文集も分析に加えた。

分析対象となった資料

中学生の感想文集には200名の感想文が掲載されていたが、ボランティア動機と援助成果の関連を検討するために、複数の活動に対する感想が記述された20名の感想文を分析から除外し、180名の感想文を分析対象とした。

高校生以上の感想文集には、成人参加者の感想文が掲載されていたため、これらの感想文を分析から除外し、183名の感想文を分析対象とした。参加者の性別は、感想文に記載された氏名から推定を行ったが、中学生2名、高校生1名の性別が特定できなかった。

最終的に分析対象となったのは調査対象者中学生男子64名、中学生女子114名、高校生男子27名、高校生女子155名の感想文であった。

結 果

ボランティア活動を行う中高生の感想文の内容分析に当たり、以下の分析を行う。

第1に、中高生の感想文から記述をデータとして抽出し、川喜多(1967)が開発したKJ法を援用してボランティア動機カテゴリーと援助成果カテゴリーに分類する。

第2に、分類されたカテゴリーに含まれる記述数を数え、中高生間の違いを検討する。

第3に、ボランティア動機と援助成果の関連について、クロス表に基づく数量化Ⅲ類(双対尺度法)を用いて検討する。

ボランティア活動分野

ボランティア活動分野を、活動内容から「医療(高

校生28名、中学生0名)」「高齢者(高校生23名、中学生7名)」「障害者(高校生13名、高校生27名)」「児童(高校生77名、中学生6名)」「国際(高校生12名、中学生13名)」「文化(高校生13名、中学生18名)」「まちづくり(高校生17名、中学生40名)」「防犯(高校生0名、中学生8名)」「清掃(高校生0名、中学生36名)」「環境(高校生0名、中学生25名)」の10分野に分類した²⁾。活動分野の分類について、心理学を専攻する大学院生1名に、著者と独立して評定を求めた結果、2名の評定者の評定一致率は100%であった。

次に、中高生の活動分野ごとの参加状況を把握するために、活動分野を被援助者の有無によって2群に分け、中高生間の違いについてFisherの直接確率計算を行った³⁾。その結果、中学生は被援助者が存在しない活動への参加が多く、高校生は被援助者が存在する活動への参加が多かった($p < .01$)。

ボランティア動機のカテゴリー分類

中高生のボランティア動機について、高校生の感想文より75件、中学生の感想文より32件のデータを抽出した。抽出したデータは、KJ法を援用して類似するデータをまとめ、「興味・関心动機」、「自己志向的動機」、「他者志向的動機」、「外発性動機」の4つのボランティア動機カテゴリーを生成した。

「興味・関心动機」は、ボランティア活動に対する興味や活動内容への関心から、活動に参加した経緯が記述されたカテゴリーである。主な記述例は「以前よりボランティアに興味があった」、「環境問題に関心があった」、「子どもが好きだから」などであった。

「自己志向的動機」は、活動を行うことが自分にとって役立つと考え、活動に参加した経緯が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「将来の仕事に役立つと思った」、「自分を成長させたいと思った」、「以前参加して楽しかったので、また参加したいと思った」、「何か新しく感動できる体験をしたいと思った」などであった。

「他者志向的動機」は、援助を必要とする人や地域の役に立ちたいと考え、活動に参加した経緯が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「人の

2) ボランティア活動分野の分類にあたっては、総務省統計局(2001)の分類を参考にした。

3) 被援助者が存在する活動分野として「医療」、「高齢者」、「障害者」、「児童」、「国際」の5分野(中学生53名、高校生153名)、被援助者が存在しない活動分野として「文化」、「まちづくり」、「防犯」、「清掃」、「環境」の5分野(中学生127名、高校生30名)に分類した。

役に立ちたいと思った」、「地域の役に立ちたいと思った」などであった。

“外発性動機”は、他者の影響から活動に参加した経緯が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「学校の宿題や先生に勧められた」、「親や家族に勧められた」、「友人に誘われた」などであった。

次に、感想文から抽出したデータ107件のカテゴリー評定を、心理学を専攻する大学院生1名に著者と独立して評定を求めた。その結果、2名の評定者の評定一致率は95.2%であった ($\kappa = .93$)。一致しないデータについては、感想文を再検討し、カテゴリーを確定させた。また、どのカテゴリーにも分類不能であった「何となく」、「家から近かったから」の2データを除外した。

ボランティア動機カテゴリーの分類に基づき、ボランティア動機の違いについて、動機毎に *Fisher* の直接確率計算で中高生間の比較を行った。その結果、高校生は中学生よりも“自己志向的動機”が多く、中学生は高校生よりも“他者志向的動機”、“外発性動機”が多かった (Table 1)。

ボランティア活動の援助成果のカテゴリー分類

中高生におけるボランティア活動の援助成果について、高校生の感想文より365件、中学生の感想文より271件のデータを抽出した。抽出したデータは、KJ法を援用して類似するデータをまとめ、8つの援助成果カテゴリーを生成した。

“活動への理解と関心”は、活動に対する理解の深まり、活動を通じての参加者自身の意識の変化が記述されたカテゴリーである。主な記述例は「自然の大切さを知った」、「ゴミのない街を作りたいと思った」などであった。

“被援助者への理解と関心”は、活動の対象となった障害者、高齢者、子ども、外国人など被援助者が抱える問題を理解する、被援助者に対する意識や考え方の肯定的な変化が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「お年寄りを大切にしたいと思っ

た」、「障害者は普通の人と変わらないと思った」、などであった。

“被援助者との良い関わり”は、障害のある方やお年寄り、子どもや外国の方など、被援助者との関わりを好ましく感じたという内容が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「障害のある方と仲良くなれてうれしかった」、「外国の方と仲良くなって楽しかった」などであった。

“被援助者以外の人との良い関わり”は、活動で関わった受入施設の職員や地域のボランティア、他校の生徒など、被援助者以外の他者との関わりを好ましく感じたという内容が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「新しい友人ができてうれしかった」、「地域のボランティアと仲良くなるのができて楽しかった」などであった。

“ボランティア活動に対する肯定的評価”は、ボランティア活動を肯定的に評価する内容が記述されたカテゴリーである。なお、活動全体を肯定的に振り返る記述も、このカテゴリーに分類した。主な記述例は、「ボランティアは楽しいと思った」、「ボランティアには達成感があった」、「ボランティア活動の意義を理解した」、「自分自身が成長できた」などであった。

“ボランティア活動に対する否定的評価”は、ボランティア活動を否定的に評価する内容が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「ボランティアは大変だった」、「ボランティアは難しいと思った」などであった。

“仕事への理解”は、職業に関する理解や、将来の仕事に対する意欲の高まりが記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「働くことの大変さを知った」、「将来は福祉の仕事に就きたいと思った」などであった。

“思いやりの学びと感謝される喜び”は、活動を通じて感謝された、人を助けることの喜びを感じたという内容が記述されたカテゴリーである。主な記述例は、「『ありがとう』と言われてうれしかった」、「人を助ける方法を学ぶことができた」などであった。

次に、感想文から抽出した636件のデータのカテゴリー評定を行った。カテゴリー評定は、心理学を専攻する大学院生2名に、著者と独立して評定を求めた。その結果、3名の評定者の評定一致率は97.2%であった ($\kappa = .97$)。一致しないデータについては、感想文を再検討し、カテゴリーを確定させた。

援助成果カテゴリーの分類に基づき、ボランティア活動の援助成果の違いについて、援助成果毎に

Table 1
ボランティア動機の中高生間比較

カテゴリー／ <i>n</i>	高校生		中学生		
	100.0	73	100.0	32	
興味・関心动機	15.1	11	28.1	9	<i>n.s.</i>
自己志向的動機	69.9	51	18.8	6	**
他者志向的動機	5.5	4	21.9	7	*
外発性動機	9.6	7	31.3	10	**

** $p < .01$, * $p < .05$ 表中の数値は百分率

Fisherの直接確率計算を用いて中高生間の比較を行った。中高生間で活動分野ごとの参加状況に違いが見られたため、被援助者の有無により2群に分けて解析を行った。結果をTable 2に示す。被援助者が存在する活動において、中学生は高校生よりも“活動への理解と関心”、“被援助者への理解と関心”、“被援助者以外の人との良い関わり”、“ボランティア活動に関する肯定的評価”が多く、高校生は中学生よりも“仕事への理解”が多かった。一方、被援助者が存在しない活動において、中学生は高校生よりも“活動への理解と関心”が多く、高校生は中学生よりも“被援助者以外の人との良い関わり”、“仕事への理解”が多かった。

この結果から、被援助者の有無を問わず、中学生は高校生よりも援助成果として“活動への理解と関心”が多く、高校生は中学生よりも“仕事への理解”が多いことが明らかになった。

ボランティア動機と援助成果の関連

中高生のボランティア動機と援助成果の関連を把握するために、ボランティア動機ごとに得られた援助成果カテゴリーの集計結果 (Table 3) に対して、クロス表に基づく数量化Ⅲ類 (双対尺度法) を行った。分析にあたっては、各カテゴリーへの回答率 (%) を実数データとみなして解析を行った。結果をFigure 1に示す。第1成分の相関比は .364、第2成分の相関比は .261であった。

第1象限には、“自己志向的動機”があり、“被援助者との良い関わり”と“仕事への理解”が近傍に位置していた。

第2象限には、“他者志向的動機”があり、“思いやりの気持ちの学びと感謝される喜び”と“被援助者への理解と関心”が近傍に位置していた。

第3象限には、“外発性動機”があり、“活動への理解と関心”と“ボランティア活動に対する肯定的

Table 2
援助成果の中高生間比較

被援助者の有無 学校段階 カテゴリー / n	被援助者あり				被援助者なし			
	高校生		中学生		高校生		中学生	
	100.0	310	100.0	99	100.0	55	100.0	172
活動への理解と関心	0.3	1	8.1	8 **	0.0	0	25.6	44 **
被援助者への理解と関心	7.1	22	26.3	26 **	0.0	0	0.0	0
被援助者との良い関わり	21.6	67	14.1	14 n.s.	0.0	0	0.0	0
被援助者以外の人との良い関わり	2.9	9	8.1	8 *	36.4	20	19.2	33 *
活動に対する肯定的評価	11.3	35	22.2	22 *	18.2	10	30.8	53 n.s.
活動に対する否定的評価	12.3	38	8.1	8 n.s.	18.2	10	11.6	20 n.s.
仕事への理解	33.9	105	3.0	3 **	20.0	11	1.2	2 **
思いやりの学びと感謝される喜び	10.6	33	10.1	10 n.s.	7.3	4	11.6	20 n.s.

** $p < .01$, * $p < .05$ 表中の数値は百分率

Table 3
ボランティア動機と援助成果の比率

	活動理解	被援助者理解	被援助者との関わり	被援助者以外との関わり	ボラ肯定	ボラ否定	仕事理解	思いやりと感謝
興味・関心動機	100.0	8.8	5.9	17.6	8.8	20.6	14.7	20.6
自己志向的動機	100.0	0.0	3.0	20.2	3.0	11.1	11.1	40.4
他者志向的動機	100.0	7.7	15.4	15.4	0.0	15.4	7.7	15.4
外発性動機	100.0	4.6	18.2	13.6	4.6	22.7	9.1	9.1

表中の数値は百分率

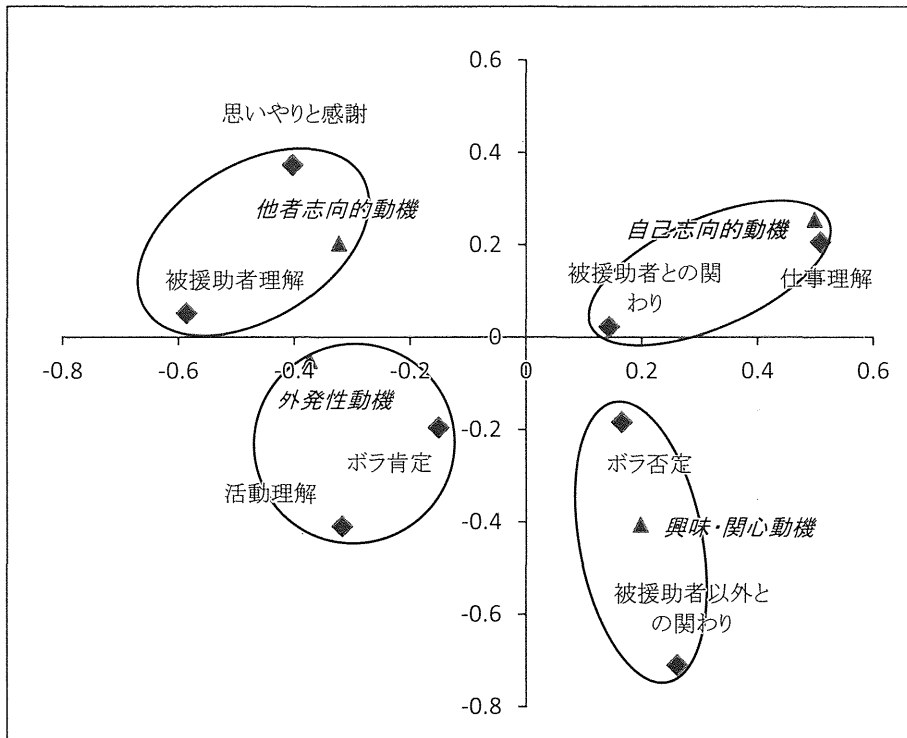


Figure 1. ボランティア動機と援助成果の関連

評価”が近傍に位置していた。

第4象限には、“興味・関心動機”があり、“被援助者以外の人との良い関わり”と“ボランティア活動に対する否定的評価”が近傍に位置していた。

考 察

本研究は、ボランティア活動を行う中高生の同活動に対する感想文の内容分析から、中高生のボランティア動機とボランティア活動の援助成果について、探索的に検討を行った。また、ボランティア動機とボランティア活動の援助成果の中学生間の違いについて検討を行った。さらに、ボランティア動機と援助成果の関連についても検討を行った。

中高生のボランティア動機

中高生のボランティア動機は、“興味・関心動機”、“自己志向的動機”、“他者志向的動機”、“外発性動機”の4カテゴリーに分類された。この結果から、成人だけではなく、中学生においてもボランティア動機が複数存在することが確認された。

成人のボランティア動機に関する研究知見と比較

すると、“興味・関心動機”は、活動への興味や関心から活動に参加する動機であり、“自己志向的動機”（自己志向動機 (Oda, 1991), 自己啓発的動機, 功利的動機 (山口・高木, 1993), 知識, 社会的, 経歴, 自我防衛 (Clary et al., 1998), 報酬期待動機, 技術・知識の活用動機 (青山他, 2000)) に該当すると考えられる。“自己志向的動機”は、活動を行うことが自分の役に立つと考える動機であることから、“自己志向的動機”に該当すると考えられる。援助行動研究における利己的動機は、援助を必要とする相手に直面した際に生じる自己の苦痛を低減することを最終的な目的とした動機であり、援助以外の方法で苦痛が低減できる場合には援助が行われないと理論化されていた (Batson & Oleson, 1991など)。しかし本研究の“自己志向的動機”は、活動を行うことが自分の役に立つという内容であることから、利己的動機とは異なると考えられる。“他者志向的動機”は、援助を必要とする人や、地域の役に立ちたいと考える動機であることから、“他者志向的動機”（他者志向動機, 互惠的動機 (Oda, 1991), 他者共感的動機, 規範的動機 (山口・高木, 1993), 価値, 強化 (Clary et al., 1998), 自発的動機,

共感的動機、社会的規範動機(青山他, 2000))に該当すると考えられる。“外発性動機”については、学校の先生や、家族の影響により活動に参加したという内容であることから、成人のボランティア動機には見られない学齢期特有の動機と考えられる。

中高生のボランティア活動の援助成果

中高生のボランティア活動の援助成果は、“活動への理解と関心”、“被援助者への理解と関心”、“被援助者との良い関わり”、“被援助者以外の人の良い関わり”、“ボランティア活動に対する肯定的評価”、“ボランティア活動に対する否定的評価”、“仕事への理解”、“思いやりの学びと感謝される喜び”の8カテゴリーに分類された。この結果から、ボランティア活動を行う成人を対象とした研究(妹尾・高木, 2003, など)と同様に、中高生もボランティア活動から複数の援助成果を得ていた。

中高生のボランティア活動の援助成果を、成人のボランティア活動研究で抽出された援助成果と比較すると、“活動への理解と関心”、“被援助者への理解と関心”は、“知識”(Clary et al., 1998)に該当すると考えられる。“ボランティア活動に対する肯定的評価”は、“強化”、“知識”(Clary et al., 1998)、“自己報酬感(妹尾, 2008)”に該当すると考えられる。“ボランティア活動に対する否定的評価”は、“知識”(Clary et al., 1998)に該当すると考えられる。“被援助者との良い関わり”、“被援助者以外の人の良い関わり”は、“社会的”(Clary et al., 1998)、“人間関係の広がり”(妹尾・高木, 2003)に該当すると考えられる。“仕事への理解”は、“経歴”や“知識”(Clary et al., 1998)に該当すると考えられる。“思いやりの気持ちと感謝される喜び”は、“価値”(Clary et al., 1998)、“愛他的精神の昂揚”(妹尾・高木, 2003, 妹尾, 2008)に該当すると考えられる。

ボランティア活動に関する心理の中高生間比較

ボランティア動機は、中学生は高校生よりも“外発性動機”、“他者志向的動機”が多く、高校生は中学生よりも、“自己志向的動機”が多かった。

向社会的行動の動機研究では、向社会的行動の動機は発達段階により異なることが指摘されていたが(Eisenberg-Berg, 1979など)、日本の青少年は発達段階に関わりなく共感的な動機から愛他的行動を行うことが報告されていた(松井, 1991など)。本研究では、中学生に“他者志向動機”が多く、高校生に“自己志向動機”が多かった。この結果から、中高生のボランティア動機は他者志向の動機から自己

志向の動機へと発達的に変化していると考えられる。

ボランティア活動の援助成果は、被援助者の有無を問わず、中学生は“活動への理解と関心”、高校生は“仕事への理解”を援助成果として得ていた。先行研究では、発達段階毎の援助成果の違いについては検討されていなかった。本研究では、中学生と高校生とでは異なる援助成果が得られていたことから、発達段階毎に異なる援助成果が存在する可能性が考えられる。

ボランティア動機と援助成果の関連

クロス表に基づく数量化Ⅲ類(双対尺度法)の結果、ボランティア動機と援助成果には対応関係が見られた。

困っている人を助けたいといった他者志向の動機から活動を行った中高生は、被援助者に対する理解を深め、思いやりの大切さや、他者から感謝される喜びを経験していた。

学校の先生の勧めや、友人からの誘いといった外発的な動機から活動を行った中高生は、活動経験を通じてボランティア活動の意義や目的を理解し、ボランティア活動を肯定的に評価していた。

ボランティア活動に対する興味や関心から活動を行った中高生は、受入先の職員や地域のボランティアとの好ましい関わりを経験し、ボランティア活動の大変さを理解していた。

活動が自分の役に立つといった自己志向の動機から活動を行った中高生は、被援助者との好ましい関わりを経験し、職業に対する理解や関心を高めていた。

成人を対象にしたボランティア活動の心理過程に関する研究では、ボランティア動機と活動内容が一致した場合に活動の満足感が高まっていた(Clary et al., 1998)。本研究のボランティア動機と援助成果の関連においては、成人のボランティア活動の援助成果の“知識(Clary, et al., 1998)”に該当する援助成果が、すべてのボランティア動機に対応していた。この結果から、ボランティア活動を行う中高生は、ボランティア動機の内容に関わりなく、活動経験を通じて活動に関連する知識を得ていると考えられる。また、ボランティア活動への参加が、高校生の社会に対する関心を高めることが明らかにされていた(Johnson, et al., 1998など)が、本研究の結果から、ボランティア活動経験によって得られた知識が、中高生の社会に対する関心を高めると考えられる。

本研究は、ボランティア活動を行う中高生のボラ

ンティア動機とボランティア活動の援助成果について検討を行い、成人と同様に、ボランティア動機や援助成果が複数存在することが確認された。さらに、ボランティア動機は発達のに変化し、発達段階毎に特有の援助成果が存在する可能性が示された。また、ボランティア動機と援助成果との対応関係が明らかにされ、ボランティア動機に関わらず、活動に関連する知識を得ている可能性が示された。

今後の課題

本研究では、先行研究では検討されていなかったボランティア活動を行う中高生の心理について新たな知見を得ることができたが、本研究の方法はあくまでも探索的な方法であるため、今後は本研究で得られた結果を、量的データを用いて確証的に検討する必要がある。

文 献

- 青山美智代・西川正之・秋山 学・中迫 勝 (2000). 老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究. 大阪教育大学紀要IV, 教育科学48, 343-358.
- Batson, C.D. & Oleson, K.C. (1991). Current status of the empathy-altruism hypothesis. In M. S. Clark (ED.), *Prosocial behavior*. SAGE.
- 中央教育審議会 (1996). 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (答申).
- 中央教育審議会 (2002). 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申).
- Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1561-1530.
- Eisenberg-Berg, N. (1979). Development of children's prosocial moral judgment. *Developmental Psychology*, 15, 128-137.
- Johnson, M. K., Beebe, T., Mortimer, J. T., & Snyder, M. (1998). Volunteer in adolescent: a process perspective. *Journal of Research on Adolescence*, 8, 309-332.
- 川喜多二郎 (1967). 発想法 中公新書
- 川元克秀・佐藤 陽・菊田英代子・松尾 素・諏訪 徹・土井 進・中島 修・高野利雄・柴田 博 (1999). 福祉教育・ボランティア学習活動による学習者の即時的変容の内容とその意味. 福祉教育・ボランティア学習研究年報, 4, 82-110.
- 松井 洋 (1991). 青年期における愛他行動の発達とその規定因. 川村学園女子大学研究紀要, 2, 181-193.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之 (1998). 愛他性の構造に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学・高校生を対象として—. 社会心理学研究, 13, 133-142.
- 松井 豊 (1981). 援助行動の構造分析. 心理学研究, 52, 226-232.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久 (1992). 『非行抑止要因の文化差に関する研究—日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として』. 財団法人日工組調査研究財団委託研究報告書.
- Oda, N. (1991). Motives of volunteer works: Self-and other-oriented motives. *Tohoku Psychological Folia*, 50, 55-61.
- 妹尾香織 (2001). 援助行動における援助者の心理的效果：研究の社会的背景と理論的枠組み. 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 55, 181-194.
- 妹尾香織 (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16, 35-42.
- 妹尾香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究, 18, 106-118.
- 総務省青少年対策本部 (編) (1994). 青少年とボランティア活動「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書. 大蔵省印刷局.
- 総務省統計局 (2001). 社会生活基本調査報告 (平成13年). 日本統計協会.
- 山口智子・高木 修 (1993). ボランティア動機の構造について. 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 224-225.

(受稿10月25日：受理11月25日)